話しことばの助詞
— 「って」を中心に —

丸 山 直 子

0. はじめに

話しことばと書きことばの違いの一つに、用いられる助詞の違いがある。話しことばに、より多く見られる助詞として、「なんか」「なんて」「とか」「って」等があるが、本稿では、その中で「って」を中心に論じる。従来の助詞の枠組みで捉えるならば、格助詞・係助詞・終助詞等複数の助詞にまたがる存在である「って」の用いられ方について、いくつかのコーパスを調査してその分布を見ると同時に、話しことばの助詞を扱う際の問題点について整理することを本稿の目標とする。

1. 「って」は何の助詞か?

「って」は、これまで、いくつかの助詞にまたがって分類されてきた。『現代語の助詞・助動詞』（国立国語研究所1951、以下「国研」）においては、「って」の形が、格助詞・係助詞・終助詞、「だって」が係助詞、「たって」が接続助詞、「ってば」が係助詞と終助詞に登録されている。『日本語文法大辞典』（山口明穂他編2001、以下「文法大辞典」）においても、細分は異なるものの、大きな分類はほぼ同じである。更に、各種小型国語辞典においては、例えば、『岩波国語辞典第六版』（以下「岩波」）では「って」を、接続助詞・係助詞・格助詞・連語の四つに分類し、「だって」を連語と接続詞、「たって」「ってば」を連語とする。『新明解国語辞典第五版』（以下「新明解」）では「って」を「格助詞的にも接続助詞的にも用いられる」ものと「終助詞的に」用いられるものの2種類に分け、「だって」を接続詞と副助詞に、「たって」を接続助詞にしている。「ってば」の立項はない（「てば」の形を副助詞・終助詞としている）。

更に、コンピュータによる形態素解析プログラムJUMAN(1)においては、「って」
を副助詞、「だって」を副助詞と接続詞にしており、談話(2)においては、「って」を
格助詞（連語）、「っていう」を格助詞（連語）、「だって」を副助詞と接続詞にし
ている。（「だって」「ってば」については、両者とも特に登録していない。）

そもそも助詞全体をどのように分類するのが妥当なのかであろうか。
山田孝雄氏は、格助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間投助詞・接続助詞という
六分類を提唱し、それに、橋本進吉氏が、並立助詞・準体助詞・準副体助詞（連
体助詞）などを加えた。最近は、副助詞と係助詞を合わせて「とりたて詞」「取り
立て（とりたて）助詞」とする場合も多い（この場合、主題を表す「は」は「提出
題の助詞」等として別扱いすることが多い）。副助詞・係助詞については、それぞれ
にどの助詞を含めるかについて議論の余地があるが、「とりたて」の概念にもま
だ不確定な部分が多い。本稿では、伝統的な副助詞・係助詞の名称を主に用いる
こととする。

話しことばの助詞に何助詞かというレッテルを貼ろうとする場合、とまどうこ
とがままある。話しことばの助詞には、複合表現（連語）や圧縮表現が多いため
である。（このことは助詞に限った話ではない。話しことばには、構して他の成分
と結合して一成分化した表現や圧縮表現が多い。）「って」の場合、例えば新明解
に「と言われても」の圧縮表現とされている用法「どうするかって、僕にだって
分からないよ」の場合、もとの形に戻して考えるなら「って」は「と」「言う」「れ
る」「て」「も」の５語からなる表現ということになり、構文的にも複文と考えら
れる。が、ひとたび「って」の形で現れてしまうと、もはや複文と考えることま
できないと考えればよいのか、悩むことになる。話しことばの助詞にレッテルを貼ることのむず
かしさと意味についての一般論は第３節で再考することにして、とりあえず、本
稿では「って」にどのようなレッテルを貼るのか、下記に記す。

「って」の代表的な用法として、引用の「と」と同じように使われるものがある。
「言う」「思う」などの引用動詞とともに用いられる場合が多いが、引用動詞が現
れないものもある。引用動詞と共起するものをA、共起しないものをBとする。

Aの例：知らないっていえばいいのに。（国研） ＜格助詞＞

- 118 -
Bの例：映画を見て行くて出かけましたよ。（新明解）＜格助詞＞

これらは、引用の「と」を格助詞と捉えるならば、同じく格助詞と捉えられるべきものである。Bのように引用動詞とともに用いられない用法は、助詞「と」にも見られるが、「と」の場合は、「といって」の省略と考える説と考えない説がある（鎌田2000）。「って」は新明解に「「といって」の圧縮表現」とあるように、より「言って」の部分を内に含む表現という印象が強い。

Aの中には、「っていう」が連体助詞のように働くものがある。「ポチっていう名前」のようなもので、前述の通り、茶釜では「っていう」を一成分とみて「格助詞」としている。これは「という」にも全く同じ用法がある。更に「いう」が省略されて「ポチって名前」のように表現されることがある。この場合は、「って」が連体助詞の働きをしていると考えざるを得ない（新明解では「「という」の圧縮表現」としている）。

Cの例：この犬、ポチって名前なんだ。（岩波）＜連体助詞＞

また、同じく「という」にかかわる表現として、「銀座っていいところだね。」のようなものがある。新明解で「「という（もの）は」の圧縮表現」とされているのである。この類をDとする。主題提示の働きをするとみなされるために、係助詞もしくは提題助詞に分類される。

Dの例：銀座っていいところだね。（岩波）＜係（提題）助詞＞

Dの中には、自分が持ち出した主題以外に、相手の発話を繰り返すものがある。例えば、「銀座ってどこ？」という表現の場面で、自らが「銀座」という主題を持ち出す場合と、相手が「銀座」と言ったのを受けて、それについて言う場合がある。後者を特にD′とする。

D′の例：（相手が「銀座」と言ったのを受けて）銀座ってどこ？＜係（提題）助詞＞
「銀座というのはどこ？」というふうにパラフレーズすることも可能だが、「銀座って（今あなたは言ったけど、それは）どこ？」の括弧内が省略された表現をみることもできる。そう考えると、次の表現「どうするかって、僕にだって分からないよ」という表現とつながってくる。これも、「どうするかって（今あなたは言ったけど、そんなことは）僕にだって分からないよ」とパラフレーズできるからである。新明解では「「と言われても」の圧縮表現」としている。

Eの例：どうするかって、僕にだって分からないよ。（新明解）
＜係（提題）助詞＞

要するに、相手の言ったことを引き取って「って」で提示し、それについてコメントしている。その意味で「～って」は主題的成分である。もともとこの「って」は引用の格助詞なので、括弧内が存在しないことで係り先を失い、主題提示のようになって、係助詞化（提題助詞化）していると言える。

更に、「って」が文末に使われるとき助詞化する。「ええ？死んだって？」のように聞き返すものGは、Eに似ている。「死んだって、どういうことだ？」の「どういうことだ？」を省略したものとも考えられる。

Gの例：ええ？死んだって？（新明解）
＜終助詞＞

一方、聞き返しではない文末用法もある。伝聞の「って」と言われるもの（F）がそれである。

Fの例：合格したんだってね。（岩波）
＜終助詞＞

「ですって」「だって」でイディオム化しているとも言える（山崎1996）。「ですって」「だって」の付かない表現「行くって。」のようなもの場合、「行くって（言ってたよ。）」という略を考えることもできる。文脈上、前に「言う」「思う」などの引用動詞を伴うものもあり、それらは「倒置」と考えることができる（「言ってたよ、行くって。」のようなものである）。倒置ではなく（引用動詞を伴わず）、単独で使われたとき、終助詞として意識される。引用と伝聞の関係については、山崎
1996年詳しい。伝聞の「って」を質問文の形で用いることもできる。これをF' でしょう。

F'の例：合格したんだって？ ＜終助詞＞

尋ねているという点ではGと同じだが、相手が言ったことについてその場で聞き返すGとは性質が異なる。自分が前に伝聞したことについて真偽を確かめる文となっている。

終助詞化したもののには、聞き返し・伝聞の他に、更に、主張というべき用法がある（H, I）。Hは「～って（言ってるじゃないか）」から、Iは「～って（言うんだ）」のような表現をもとにするとと思われる。

Hの例：わかってるって。（文法大辞典） ＜終助詞＞
Iの例：誰があんなところに行くかって。（文法大辞典） ＜終助詞＞

以上を整理すると以下のようになる。

【格助詞の「って」】—引用
A：「って」＋引用動詞 知らないっていえばいいのに。（国研）
B：「って」＋非引用動詞 映画を見に行くって出かけましたよ。（新明解）

【連体助詞の「って」】
C： この犬、ポチって名前なんだ。（岩波）

【係助詞の「って」】
D：提題（自分で持ち出し） 銀座なんていいところだね。（岩波）
D'：提題（相手を受けて）（相手が「銀座」と言ったのを受けて）銀座ってどこ？
E：提題（相手を受けて） どうするかって、僕にだって分からないよ。（新明解）

【終助詞の「って」】
F：伝聞 合格したんだってね。（岩波）
F'：伝聞（質問） 合格したんだって？
G：聞き返し ええ？死んだって？（新明解）
H：主張
I：主張（反語）

わかったね。
誰があんなところに行くかね。

派生関係を図示すると次のようになろう。全て、引用の格助詞からの派生と考えられる。

| A（格助詞） | B（格助詞） | 係り先が引用動詞→係り先が引用動詞以外 |
| A（格助詞） | C（連体助詞） | 「っていう」→「って」 |
| A（格助詞） | D（係助詞） | 自分で持ち出すもの（主題的に提示） |
|             | D′・E（係助詞） | 相手の発言を繰り返すもの（主題的に提示） |
|             | G（終助詞） | 相手の発言を繰り返すもの（聞き返し） |
|             | 倒置の用法 |
|             | F（終助詞） | 引用→伝聞 |
|             | H（終助詞） | 引用→主張 |
|             | I（終助詞） | 引用→主張（反語） |

最後に、「って」単独ではなく、他の成分と結合することで、一つの成分になったと思われるものがある。接続詞「だって」、係助詞（とりたて助詞）「だって」、接続助詞「たって」がそれである。「だって」「たって」からできており、もともとは一語でないが、既に一語化していると捉えられるものである。係助詞「だって」は、係助詞「でも」と、接続助詞「たって」は接続助詞「ても」と、大変似ている。「っては」とも、既に一語化しているとみてよいかかもしれない。これは「だったら」との互換性が問題になる。

他の助詞との関連で言えば、次のような助詞との間に似寄りが見られ、使い分け等が議論されるところである。

| 格助詞の「って」A B | 格助詞の「と」 | 引用 |
| 係助詞の「って」D E | 係助詞の「は」、「は」、無助詞 | 提題 |
| 終助詞の「って」F | 終助詞の「と」（「だっさ」） | 伝聞 |
| 終助詞の「って」G | 終助詞の「と」（「なんだと？」） | 関き返し |
| （九州方言の「～すると？」） |
| 係助詞の「だって」 | 係助詞の「も」「でも」 | 同類・意外 |
接続助詞の「たって」 ～ 接続助詞の「ても」 逆接
係助詞の「ってば」 ～ 係助詞の「ったら」 提題
終助詞の「ってば」 ～ 終助詞の「ったら」 主張

以上、それぞれの用法の派生関係や互換性が問題になる助詞を見てみた。
次節では、実際のコーパスの中で、上記の用法がどのように現れるか、観察する。

2. 「って」の用法 － 新聞・小説・対話コーパスにおける分布－

一口に「話すことば」と言ってもさまざまな種類のものがある。ここでは、小規模ながら、新聞・小説・対話コーパスの3種類のデータに現れる「って」のふるまいを観察する。新聞・小説は一般に話し言葉のデータとは言えないが、その中の会話文は、話しことばの再生・なぞりとして、擬似的話しことばと捉えることができる。

用いたデータは以下の通りである。
新聞データ：日本経済新聞データベース‘93 1年分
小説データ：新潮文庫の100冊CD-ROMより
村上春樹（1985／文庫1988）「世界の終りとハードボイルド・ワーダーランド」（文庫本で、上：397ページ、下：347ページ）
曾野紘子（1973／文庫1978）「太郎物語 高校編」（文庫本で、304ページ）
対話コーパス：日本音響学会・動音声データベース調査委員会・日本情報処理
開発協会合同音声処理調査委員会編（1992）「研究用動音声データベース」CD-ROM vol.4 ～ 7。模擬対話87対話の書き起こしテキスト12,474文。

調査結果を表にまとめると、表1のようになる。
### 表1 新聞・小説・対話における「って」の分布

<table>
<thead>
<tr>
<th>格助詞の「って」</th>
<th>新 順</th>
<th>小説−村上</th>
<th>小説−曽野</th>
<th>対 話</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A. 「って」+「言う」</td>
<td>66</td>
<td>77</td>
<td>135</td>
<td>150</td>
</tr>
<tr>
<td>A. 「って」+「言う」以外の引用動詞</td>
<td>15</td>
<td>28</td>
<td>18</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>B. 「って」+非引用動詞</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>11</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>小計（格助詞）</td>
<td>85 (33.9%)</td>
<td>109 (33.2%)</td>
<td>164 (43.6%)</td>
<td>159 (72.6%)</td>
</tr>
<tr>
<td>連体助詞の「って」</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>C. 「って」+名詞</td>
<td>20</td>
<td>19</td>
<td>48</td>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>小計（連体助詞）</td>
<td>20 (8.0%)</td>
<td>19 (5.8%)</td>
<td>48 (12.8%)</td>
<td>28 (12.8%)</td>
</tr>
<tr>
<td>係助詞の「って」</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>D. 提問題（自分で持ち出し）</td>
<td>55</td>
<td>46</td>
<td>22</td>
<td>23</td>
</tr>
<tr>
<td>D'. 提問題（相手を受けて）</td>
<td>4</td>
<td>12</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>E. 提問題（相手を受けて）（反論）</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>小計（係助詞）</td>
<td>59 (23.5%)</td>
<td>58 (17.7%)</td>
<td>30 (8.0%)</td>
<td>27 (12.3%)</td>
</tr>
<tr>
<td>終助詞の「って」</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>F. 伝聞</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
<td>30</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>F'. 伝聞（質問）</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>G. 関連関</td>
<td>7</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>H. 主張</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>I. 主張（反論）</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小計（終助詞）</td>
<td>18 (7.1%)</td>
<td>6 (1.8%)</td>
<td>33 (8.8%)</td>
<td>3 (1.4%)</td>
</tr>
<tr>
<td>その他の「って」</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>係助詞の「だって」</td>
<td>40</td>
<td>100</td>
<td>52</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>接続詞の「だって」</td>
<td>3</td>
<td>14</td>
<td>25</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>接続助詞の「だって」</td>
<td>26</td>
<td>22</td>
<td>24</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小計（その他）</td>
<td>69 (27.5%)</td>
<td>136 (41.5%)</td>
<td>101 (26.8%)</td>
<td>2 (0.9%)</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>251 (100%)</td>
<td>328 (100%)</td>
<td>376 (100%)</td>
<td>219 (100%)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

数字を見ると、データによって、分布が異なるのがわかる。

### 2.1. コーパスごとに

#### 2.1.1. 新聞の「って」

新聞は1年分でも、「って」の総数が小説一作品分に満たない。出現頻度は低いと言える。他に比べて、係助詞Dの用法が多い。その中でも「〜って何」の形が目立つ。実際には、コーナーの名前に「〜って何？」が含まれていたため、表1の数値より多く見られた（コーナー名の「って何」は削除してカウントした）。コーナー名でなくとも、「読者が本当に書いて欲しいものってなんだろうね」(1993-12-29)とか、「私たちの東洋ってなんだろうと、結局、それを考えますね」(1993-12-19)のように、「〜って何」の形はよく見られる。「何」などの不定語を伴わない表現としては、「日本酒って多様化しているようにみえて、実はしてないんだ。」(1993-12-11) 「お父さんって頼りになるねえ。」(1993-12-4)のように使われている。
2.1.2. 小説の「って」

小説は二作品を調べただけでかなりの数が採れた。二作品のみなので、作者あるいは作品の癖が強く出ている可能性がある。二作品とも「って言う」が多い。人物が言ったことを振り返って会話しているシーンが多いからであろう。「学校教育というのは十六年間かけて脳味噌をすり減らせるだけのところだって祖父は言ってたわ。」（小説－村上 下 p.302）のような類である。「さっき言っただろ？ 頭が切れるってさ」（小説－村上 下 p.234）のように、「言う」が前にあって、文末に「って」が存在するものもある。これは倒置である。「あなたがキイなんだって祖父は言ってたわ。何年も前からあなた一人にポイントをしばって研究をすすめているんだってね」（小説－村上 下 p.299）この例のように、「言う」の前に他の引用文がある場合は、倒置ということでもできない。省略と考えた方がよい。「祖父がそう言ったのよ。今私の身に何かがあれば世界が終わってね。」（小説－村上 下 p.298）のように、指示語を使うものもある。また、係助詞の「だって」が非常に多い。「TVカメラだってついでっているかもしれない」（小説－村上 下 p.18）のようなもので、「も」と言えば済むところに好んで「だって」が使われている。「だって」が多いのは、特に小説－村上の特徴と言えよう。

2.1.3. 対話の「って」

対話コーパスには、「っていう」＋名詞が多いのが目立つ。「って言う」150例のうち、「っていう」が連体詞的に使われているものが111例ある。そのうち「っていうもののが50例、「っていう感じ」が16例見られる。「が」はっきり言いやすいに「っていうのが」のようにはかしていう言い方が多いためと思われる。「だって」「たって」が少なかったのは意外であった。「っていうか」が多いのも特徴と言える。「ガイドさんっていうか説明してくれる人は英語でしゃべってはったんを聞いて」のように「AっていうかBの」ように言い換えているものと、「混み具合って言うか、お昼どきはどうなんでしょう。」のように単独で用いられているものもある。概して、対話コーパスにはいろいろな用法が見られる。

まとめて述べれば、今回は調べた範囲では、新聞には係助詞Dの用法が多く、小説には係助詞A（特に「って言う」）、係助詞「だって」の用法が多い。対話には係助詞A（特に「っていう」で連体詞的に使われているものや、「っていうか」で並立助詞的に使われているものなどの複合的表現）が多い。
2.2. 分類ごとに

個々の現象を、A から順に、もう少し細かく見よう。

2.2.1. 格助詞の「って」（分類 A ・ B）

格助詞 A の用法（引用の用法）は、どのデータにも存在するが、発話するという実質的意味をもつ「言う」と共起する例は、圧倒的に小説に多い。対話コーパスに「って言う」が150例もあるのは、その大半が連体助詞としての「っていう」である（「っていうの」「っていう感じ」など）。もとのことをはかして言うこの類は、実際の会話を書き起こした対話コーパスに圧倒的に多い。「っていうか」で言い換えたり、「っていとつ」で主題提示を行う（「相馬では観光っていうと、どういうところが、例えばあるんでしょうか。」など）等も対話コーパスに特微的である。「言う」以外の引用動詞が使われる例は、対話コーパスには少ない。非引用動詞が使われる例（B）も同様。

A・Bの「って」は「と」と同じ働きと言えるだろうか。A（引用動詞と共に用いられる場合「って言った」など）については、口語的響きになるだけで、その働きは殆ど同じと言ってよいと思われる。口語っぽさ（時に子どもっぽさ）が出せるから小説に多用されるだろう。B（非引用動詞と共に用いられる場合）は、「外国人を総務屋につれていくと、普通の日本食を構えるまいて食べるのですよ」とのようなものであるが、「と」にも類似の用法があるものの、接続助詞の「と」とは異なる。心配がない分、幅広く使われるし、意味的にも「と言って」の圧縮表現とみなされることからわかるように、「言う」という要素を含んだものを解釈すれば、変える点が「と」とは異なる。「と」については、前述の通り、「言う」の省略とみなすかどうかについて議論が分かれる。

「っていう」を連体助詞として使う場合は、「という」との意味の差は殆どない。

2.2.2. 連体助詞の「って」（分類 C）

連体助詞の「って」（C）は、やはり対話コーパスに多い。「いかソーメン」だけ忘れちゃったって感じで」のように用いられる。「っての」の形（「柑橘類ってのもいろんな種類があるのよねー」）が新聞・小説に併せて多いことも目立つ。

2.2.3. 係助詞の「って」（分類 D・D´・E）

係助詞の「って」（D）は、新聞に多く見られた。同じ係助詞でも、相手の言っ
たことを受けて反論する表現E（「親がわかる怪ねないって、親は子供のこと、わからないのが当り前のよ」（小説－長野p.244）など）は、新聞には見られず、今回の調査では小説にのみ見られた。

格助詞の「って」が「と」に置き換えるに意味的に大差ないのに対して、係助詞の「って」は置き換えるのきかない場合が多い。置き換えるとすると、「というの」とは「最も近い。しかし、中には「というのとは」に置き換えないものもある。そのほか、提題という点では「とは」「は」「（無助詞）との似寄り・異なりが問題となる。D、D'のうち、「って何？」「ってどういうこと？」のようなものは「とは何か」「とはどういうことか」に置き換えることができる。文体的差異のしか感じられない。しかし、「私が落ち込んだことがないんです」（新聞コーパスより）のようなものは、「私は」に置き換えることができない。「私というものは」でも不自然で、「私という人は」なら可能である（自分のことをこのように客観視して述べる述べ方に違和感を感じる人も多いが、新しい用法として定着しつつあると言えよう）。"私は"「私φ」でも文は成立する。「ということは」「とは」「は」「（無助詞）」を置き換える可能性があるという観点から少し観察してみよう。

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>トハ</th>
<th>ハ</th>
<th>φ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>a. なるほど &quot;目から鱗が落ちる&quot; ってこのことか。（新聞）</td>
<td>☞</td>
<td>×</td>
<td>×</td>
</tr>
<tr>
<td>b. バーチャルリアリティって何ですか。（新聞）</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
<td>×</td>
</tr>
<tr>
<td>c. 医療って買うもの？（新聞）</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
<td>×</td>
</tr>
<tr>
<td>d. 都市って、実は老人用の空間なんです。（新聞）</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
<td>×</td>
</tr>
<tr>
<td>e. スキーの板ってどのくらいがいいんですか。（対話）</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>f. 私ってなんて情けない母親なんだろ（新聞）</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>g. お父さんって頼りになるわね。（新聞）</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>h. 私って落ち着いたことができるんです。（新聞）</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>i. そんな無茶苦茶な部屋の並び方ってない。（小説－村上）</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>j. そんなのってないぜ（小説－村上）</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>k. 北九州って知ってる？（新聞）</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>l. そういうのってセクシーだと思わない？（小説－村上）</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>m. ピンク色のサングラスてあると思う？（小説－村上）</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
<td>☞</td>
</tr>
<tr>
<td>n. 引き出物の定番に食器ってあるでしよう。（新聞）</td>
<td>×</td>
<td>×</td>
<td>☞</td>
</tr>
</tbody>
</table>
表2は、「とは」「は」「φ（無助詞）」の置き換え可能性を表にしたものだが、「というものは」については、aは「というのは」にしないと不自然、f.g.h.は「という人は」にしないと不自然（g.を「お父さんというものは」にすると、特定の個人ではなく、集団としての「お父さん」になる）、nは「というものがない」で不自然である。

一般的に、「aってβ」は、aについての一時的でない「恒常的な」性質βを「発見」としたとき（a.f.に顕著）、あるいは「あらためて」尋ねたり（c.e.など）伝えたり（d.h.など）したいときに多く用いられると言えようである。（渡辺1995は「["－時空"]の取り入れ」、丹羽1994は「内実の捉え直し」という言葉を使っている。）「とは」は「aはβである」のように定義するときに使われ、定義の文脈であれば「って」の代わりに使える。「って」の前に集合が来る場合は、その集合の要素はおしなべてこうこうである、という性質を述べるものになる（d.やe.）し、個体が来れば、その個体の性質として実はこうこうと述べることになる（f.g.h.など）。存否の確認（n.など）の場合は、「は」が不自然で「φ（無助詞）」の方が自然になる。このあたりのことは更に詳しく、別稿にて検討したい。

2.3.4. 終助詞の「って」（分類F・G・H）

終助詞の「って」（FGH）は、思いのほか、新聞に多かった。伝聞（F）の例としては、「大量に死んでるんですって。」（新聞）のように話し手が伝聞した第三者のことを聞き手に伝えるもの、「家を買いたいんだってね。」（新聞）のように、話し手が伝聞した、聞き手に関する情報について、聞き手に確認するものなどがある。F'はそれがはっきり質問の形をとったもので、「一日延びたんだって？」（新聞）のようなものである。Gは同じ質問文でも、聞き返しの類で、「実際のレースの方の活躍はいかほどなものかって？」（新聞）のようなものがある。話し手が聞き手の尋ねそうなことを先回りして述べる場合も多い。特に新聞によく見られる。聞き手が尋ねそうなことを述べて、それに答える形で話を進める方法である。Hは、本稿で「主張」と名づけたもので、「もっと日が短くなるまで待ちなよ。」（小説－村上）のようなものがある。Iの例は見つからなかった。

2.3.5. その他の「って」（「だって」「たって」など）

その他、係助詞の「だって」が小説に多いなどの特徴が見られた。「だって」と
「でも」「も」、「たって」と「ても」の使い分けが問題になる。このあたりの議論は別稿に譲る。

2.4. その他の話しこことば

数を採ったのは以上三つの分野だが、更に、例えば、インターネットで検索してみると、「〜って何」の形が非常に多い。「〜って？」の形(「無料プロバイダって？」など)もよく見られる。その他、「上司にお中元って贈るもの？」、「介護保険ってどんな制度？」、「携帯って楽しい」「横浜ドームってどう？」などが見られる。つまり殆ど仮助詞の「って」ということになる。

メールの中では、接続詞に分類せざるを得ないものも現れる。
例：あ、別にこんなアドレスだからって失恋したとかそういう訳ではないので心配していない。って、だれも心配しないか…。

（東京女子大学 3年生前川絵子さん提供）
メールだけでなく、日常会話の中でも使われているそうだ。雑誌への投稿文の中に見つけることができた。
例：後、問題を解く時は、切りはなさずに解く方がよいことに、今回初めて気付きました（って遲！）。（『高校への数学』11月号、p.70）

接続詞化というのは、新しい現象と言えよう。

以上、同じ話しこことばでも、話しこことばを模した形の会話文が現れる新聞・小説の場合と、話しこことばそのものの書き起こしとでは、性格がかなり異なることを実際に観察した。

3. 話しこことばの助詞—新しい形をどう捉えていくべきか—

第一節で述べたように、話しこことばの助詞に、何助詞かのレッテルを貼るのは困難を伴う。複合体・圧縮表現が多いからである。このことば、助詞に限らない。「これは」という表現を「こりゃ」と発音する場合、「これ」と「は」に切り分け考えることがむずかしくなり、「こりゃ」で一つの単位とみるむきもある。もとの形に戻して分析・解釈するのか、かたりのまま把握するのか、ということは、書きことばの世界にも存在してきた問題である。例えば、「美しかった」の「かっ」の部分は、そのもとの形が「くあり」であるところから、「美しくあった」にもど
して解釈するというのが、山田孝雄氏・水谷静夫氏の立場である。常にもとの形に戻して分析するのが妥当な方法なのであろうか。それともあくまでできあがった形で扱うべきなのであろうか。

「って」の場合には、いろいろな表現の圧縮表現と見られるものがあった。もとの形とみられるものを列挙すると、「という」「properties」「といわれても」など、そもそも用法（A）のものは、「と」を強く言ったものという説もあるので、それももとの形に戻すという意味で「と」に置き換えることにすると、置き換え可能な用法というのは、以下の通りになる。

A：「と」、B：「と」、C：「という」、D：「というものは」（？）、
D′：「とあなたは今言ったけれど、それは」
E：「とあなたは今言ったけれど、それは」「といわれても」
F・F′：（？）、G：「とあなたは今言ったけれど、それはどういうこと？」
H：「と言っているじゃないか」（？）、I：「と (%) ｕんだ」（？）

置き換えがむずかしいのは、「？」をつけたD・F・F′・H・Iである。D′・E・Gの「とあなたは今言ったけれど」という部分は、もとの形というよりは、端折られた情報というべきものである。その類は、別の形への言い換えも可能である。

H・Iについては同じことが言える。以上のように、もとの形がはっきりわかっているもの・いないもの、言い換えてもほぼ意味が同じもの・言い換えがむずかしいものの、等、いろいろなものがわかる。「って」の場合には、特に係助詞としての用法と終助詞としての用法に独自の用法が見られると言える。これらは、それでもあがった形「って」で意味記述をしていく必要がある。

また、更なる形の変化（崩れ）がある。「っていう」を「つつう」という場合などである。国研2002で「って」にかかわる形の変化を調べたところ、以下のような記載があった。

～（つ）ちゅう／～（つ）つ（う）な／～（つ）つう／
～（つ）つって／～（つ）つの／～（つ）てか／～（つ）てって／
～（つ）てな／～（つ）てん

本稿の立場としては、形の変化にも段階があり、もとの形に戻して解釈すればよい場合と、既に独自の用法を確立していて、もとの形に戻して考えることができないものがあると考える。今後、例えば上記「ってか」なども「っていうか」とは異なる用法だと判断できた時点で、「ってか」という並立助詞なり終助詞なりを設ける必要が出てくるであろう。
4. おわりに

本稿では、複数の分野のコーパスで「って」の用法を調査し、コーパスごとの使用状況の違いを観察した。話し方をとおっても、その種類によって分布の仕方が異なる。また、複合表現・圧縮表現の多い話し声と手の互換を、どのように扱っていったらよいかの考察を行った。ある程度は、もとの形と思われるものにパラフレーズして解釈することが可能だが、独自の用法を持つに至ったものは、そのことができた形で意味・用法を考える必要がある、という結論である。常に変化する意味合いに注意しつつ、調べる範囲をもっと広げて、他の助詞との違いを引き続き考えていくたい。

注
(1) JUMAN とは京都大学言語メディア研究室で開発された形態素解析システムである。
   (http://pine.kuee.kyoto-u.ac.jp/nl-resource/)
(2) 神奈川大学先端科学技术研究所大学松本研究室で開発された形態素解析システムである。
   (http://claist-nara.ac.jp/lab/nt/chasen.html)

【参考文献】
国立国語研究所（1951）「現代語の助詞・動詞・用法と実例」（国立国語研究所報告 3）。
国立国語研究所（2002）開放的融合研究推進制度「話し言葉の言語的・パラ言語的構造の解明に基づく「話し言葉工学」の構築」試作作業マニュアル。
山口明穂・秋本守英編（2001）「日本語文法大辞典」明治書院。
西尾実他編（2000）「岩波国語辞典」第六版、岩波書店。
金田一京助他編（1997）「新明解国語辞典」第五版、三省堂書店。
鎌田修（2000）「日本語の引用」ひつじ書房。
丹羽哲也（1994）主題提示の「って」と引用「人の研究」（大阪市立大学文学部紀要）第46巻第
2分冊，27-57.
野村真一（1999）「「Sッテ」文の分析 — 引用表記「ッテ」を用いたストラテジー」『金沢大学語
学・文学研究』27.1 11-11。
野村真一（2000）「「Sッテ文」伝聞用法の分析」『金沢大学語学・文学研究』28.1 1-10。
山崎誠（1996）引用・伝聞の「って」の用法：国立国語研究所研究報告集17）。
渡辺誠治（1995）新規の属性の取り入れに関わる形式 — 「ッテ」と「φ」を中心に — 「国語
学会平成 7 年度春季大会要旨集」73-80。

（まるやま なおこ 本学助教授）

－131－